

CONTENTS

文化人の本音 河合肇雄文化庁長官対談

第9回 ゲスト 安藤忠雄さん●建築家

古いものに新たな命を加えて4

長官コラム 文化庁の抜穴9

特集 独立行政法人国立美術館・国立博物館の一年を振り返って

文化庁提言

独立行政法人制度とその評価

独立行政法人国立美術館・国立博物館湯山賢一・10

施策紹介

平成13年度独立行政法人国立美術館・国立博物館の評価を終えて

.....清水眞澄・12

独立行政法人国立美術館・国立博物館に係る

業務の実績に関する評価(平成13年度)要旨14

有識者提言

独立行政法人国立美術館の一年を振り返って.....辻村哲夫・18

独立行政法人国立博物館の一年を振り返って.....野崎 弘・20

ことばの探検⑨
「夫婦」のぬくもり山口仲美・22
インタビュー 未来の扉⑨
市川美日子(女優)23
いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート⑨
地域文化資源 河内木綿を活かした教育普及活動
八尾市立歴史民俗資料館26
舞台の現場から 舞台を支える人たち⑨
音響家の憂うつ
新国立劇場吉澤 真・27
美術館と著作権契約(第3回)28
子どもたちから見た伝統的建造物群保存地区
東部町海野宿(長野県小県郡東部町)29
日本の伝統美と技を守る人々 選定保存技術保持者編21
山本清一(屋根瓦葺(本瓦葺))30
在外研修だより 新進芸術家在外研修報告⑨
.....森永明日夏・31
文化ボランティア通信
「文化ボランティア通信」第六号の概要(前編)32
日本文化の魅力発見、発信①
日本文化の魅力永井多恵子・34

平成14年度
文化庁長官表彰
表彰者決定35
平成14年度
地域文化功労者決定36
文化庁の
シンボルマークが決定!39
「文化芸術懇談会」の
開催について40
新しい国立の美術展示施設の
名称募集41

京都国立博物館
特別陳列 古筆と手鑑42
京都国立近代美術館
ウィーン美術史美術館名品展
ルネサンスからバロックへ43
東京国立博物館
立教開宗七五〇年記念
大日蓮展44

今月の
表紙東京国立近代美術館
本館2階テラス

新国立劇場スポットライト45

1月の国立劇場46

芸術文化振興基金ニュース47

題字デザイン 桑山弥三郎

古いものに新たな命を加えて



心象風景を残す

安藤 二〇世紀の後半は、世界の大多数の国々がアメリカ型の経済社会になってきましたが、日本人のよいところが消えていくのが残念です。もう少し考えて生きていかなければと思うんです。

今、東京でもどんどん新しい建築物が建てられています。産業廃棄物の八割が建築によるものだといわれており、一番の問題はそれらの産業廃棄物を捨てる場所がないということです。保存や再利用をしながら完全に捨てないようすることは、日本人の得意とするところ。昔は京都でもそのような取り組みにより建替えを行っていました。

河合 新しい家をつくるときに、ちよつと前でしたら、へあ、もったいないな〜と思うものでも、みんな潰してしまふでしょう。

安藤 日本人は古いものをうまく生かしながら、新しい命を加えていくという、民族としては相当すばらしい遺伝子をもっているんです。

もいいなと思ってるんです。

三メートルの木が並ぶと、それは森になります。ケヤキ並木と森、そういう心象風景を残していくといけません。

しかし、京都の美しい街の中に、高いものが建っていくのはどうなのかな。

河合 あれは考えるべき問題だと思えますね。自分のことだけ考えているわけでしょう。

安藤 五階ぐらいならば、それなりに街の風景に合いますが、一〇階になると難しいです。河合 特に京都の場合は、それだけが孤立しますからね。

安藤 みんなが寄添うようにして京都の美しい風景をつくってきたのに、平成の時代になくなっていくのも問題ですね。経済人たちが本気で考えないと、京都に人がきませんよ。

河合 経済というのもちよつと広い意味で考えないと、自分の範囲内だけの経済を考えるから変なことが起こる。

知識総量競争

安藤 今、子どもの教育が、知識総量競争になっていますね。小・中学校で本当に知識の詰め込みしか子どもができてしまつて、子ども時代に音楽を聞いたり、絵を描いたり、公園を走り回る時間がほとんどないですね。そのような子は、知識総量試験は上手になつてい

あんどう・ただお 建築家
1941年、大阪府生まれ。独学で建築を学び、1969年安藤忠雄建築研究所を設立。95年には建築界のノーベル賞といわれる「プリッカー建築賞」を受賞。97年東京大学教授に就任。幾何学的空間とコンクリート打ち放しという工法に新鮮な造形美を確立し、20世紀後半の建築界に新たな旋風を巻き起こした。主な代表作には92年セビリア万博日本館（スペイン）、大阪府立近つ飛鳥博物館ほか多数。東京の同潤会青山アパートの再建計画ではデザインを担当。



が、これを子どもたちに伝えていかないと、次の時代は難しいことになりそうです。

本一つでも、捨てるのはもったいないと、日本人はみんな家に置いてあるわけです。二一世紀は、家の中にいっぱいある宝物でありながら無用のものを出していくと、また違った国ができていくんじゃないかと思えますね。

河合 家の中にいる「粗大ゴミ」も使わね（笑）。

安藤 今、東京の青山の同潤会アパートの建替えをしているんです。

厩国土交通大臣が挨拶のときに、「古いものに新しい力を加えないとダメです。かつ、一〇〇年、二〇〇年もつて、イギリスのリージェントストリートや、パリのサントノールに負けない美しい街をつくってほしい」と言われましたが、ちよつとずつ入替えていかなければいけないですね。

河合 公共建物といつても、町や村の数だけ、歴史があるんですよ。

安藤 建築物をつくつていて思うのですが、建築家一人づつが公的な精神を持たないといけないと思うのです。

我々が考えたのは、屋上に軽い土をのせ三メートルの木を植えて、屋上を庭園にしよう。できるだけ実のなる木を植えて、鳥も呼んでこよう。鳥の鳴き声がいつぱいしている表参道

きますから、「一流大学へ行きますね。それが勝ち組になっているのですが、そういう人たちが日本の国を治めるといのは非常に難しいと思うんです。」

物事を考える時間がなかったらいけないのですけれど、今、都市周辺の人たちは、英語、学習、水泳、ピアノ、何でも塾なんです。それでフラフラになって帰ってくるでしょう。河合 子どもの自然な付き合いがなくて、みんな塾へ行ってるわけですね。日本の子どもはかわいそうですね。

安藤 どのようにして変えたらいいですかね。少子化で子どもは一人しかいない。勉強ばかりして、家に帰っても、近所付き合いをしている時間がないですね。

河合 今は生きる知恵というのがほとんどなくて、生きる知恵と関係ない知識ばかり増えていますからね。

安藤 それでは、国際化したときに、外国に行っても活躍できないと思います。

河合 欧米はそういうことをよく知ってるから、子どもの育て方が日本と違うんですよ。家庭のしつけがものすごくはつきりしています。夏休み、子どもはみな親を離れて、一か月ぐらい合宿に行くんです。そういうことをやらないうとだめだということをよく知っているし、家族で遊ぶというのがものすごく多いんです。



子どもを見てたら、僕なんかは子どもの味方をするもんだから、腹が立つてかわいそうですね。これを根本的に変えたいと思うんです。僕らは何とか変えたいという気があるので、いろいろやるんですけど。今、またそれが急に逆のほうへ走って、「学力低下」という言い方で出てきたもんですから、みんな妙な心配してね。難しい問題ですね。

人を伸ばす

河合 知識総量試験を押し込んでくると、創造性はどうしても潰されていく感じがしますね。創造性にはむだが多いでしょう。

安藤 いろんな体験をして感動する中で、人間の心が動く。今の子どもはそういうことがほとんどないんですね。

ば入れていくというのは、まだ続いていますよ。

その代わり、責任がその先生にかかってくる。入れても何にも伸びなかったら、その先生が悪いものとして、評価されていくのです。

大学院の入試制度をもっと考える。極端に言えば、その教授の持ち枠をせめて一人でもよいからもとめて。入れた生徒は自分の責任で入れます、一〇年後見てくださいということまで考えないと、だめだと思えますよ。やっぱりその人の適性は知識総量と別ですから。

安藤 日本の大学の先生は終身雇用、年功序列ですから、必ず助教教授になったり教授になるわけですね。我々みたいに、突然、入ってきたら、それまでの序列が変わってしまうわけです。大騒ぎでしたが、そういうことが大いに広まっていけないといけない。一番考えないといけないのは、先生方の縦割です。おもしろい人がいたら、やつぱりもつと交流しないよね。今の学問は一つの学問だけではやっていけない。

コラボレーション

河合 日本人が行うシンポジウムというのは、なかなかシンポジウムにならないんです。

みんな勝手なことをしゃべって、ほとんど交わらない。「線路は続くよ、どこまでも」みたいなもので、言いつ放しで終わり。

安藤 優秀な人たちが、互いに自分の意見を



言うだけで、コラボレーションしないですね。河合 それでも建築の場合は、コラボレーションなしでやることは不可能ではないですか。安藤 建築は、環境も、歴史も、伝統・文化の問題も考えないといけないのですが、建築をつくる人は自己完結型の人が多いんですよ。例えば、一本の木を植えたからって何もならないけれども、ひよっとしたらそれを見て、「育つ」ということを勉強する人もいるかも知からない。一〇人に一人ぐらいいたら十分だと思っんですが、建築をとおして子どもが学ぶ機会をつくれたら、我々として成功だなと思うんです。

だけど、建築家でもおもしろい人がいるんですよ。「自分のつくった建築の前には、絶対木が映ってはいけません」と言う人がいるんで

だから、もし一流大学へ入ったならば、一年目は勉強させて、二年目に半年ぐらい旅行するのも、本を読むのも、ボランティアするのもいい。ともかく自由らせて、自分なりの人生を一遍考えてみたらいいと思うんです。何をするかというのを真剣に考え、適性を探す時間が半年あれば、一〇人に一人や二人は目覚める。一人か二人目覚めればリーダーができますから、次のリーダーができると、日本はやっている。

河合 本当の意味のリーダーをつくるためのことを考えないといけない。大学院の入学試験のときに、半年遊んできて、遊んだ成果を出してみろと。そこで出せないような人は入れないというのの一つの方法です。今、三月卒業でしょう。だから、試験を九月にするんです。

安藤 大学院の入学試験でも、昔は自分のゼミにいた生徒を、おもしろそうだから大学院へ入れようかという判断があったんですが、今、東京大学の建築学科は成績の順番で選んでいます。おもしろいと思う子どもでも、先生方も割と短絡的に「いや、成績悪いから落としましょう」と言うのを、私が「入れてやれ」と。

河合 人間の評価というときに、ペーパーテストで出てきた点は、一つの点数、評価ですが、それが絶対的なものだと思うれています。ヨーロッパでは、その先生がおもしろいと思え

す。完全に自分のきれいな建築だけ置いてもらわないといけない。

河合 ヘエーッ。「人が住んではいけません」とかって(笑)。

安藤 結構建築の人は変わった人が多いんですよ。僕が二〇代の初めに建築事務所へ行ったときに、その先生が「建築というのはそんなに難しい。才能も要るけれども、もし大きな木があったら、木に隠れるように建築をつくっておけ。木がなかったら、前に木を植えておけ。三年もたったら、下手でも見えなくなる」という話をしたんです。その人からは、建築というのは周囲や、人間との関係の中でつくくるんだから、建物だけでは何もできないということを教えてもらったと思うんです。

ほとんどの建築家が絶対的に建築をつくることを考えるんですね。優秀な人ほど自分のことを絶対だと思っているんですね。

河合 コラボレーションとは、下手すると、おれは王様だということになりますよね。

文化の基礎を守る

安藤 建築でも、経済でも、企業でも、多くの人は、縦割でやってきたんですね。もうちょっと人の意見を聞きながらやっていかないと、この地球の中で仲良く生きられない。

河合 ヨーロッパの建築をする人なんかはど

んな感じですか。やっぱりバーンとつくる？
安藤 アメリカはもうあまり建築のことを考えてないんです。環境よりも、ともかくどれだけ耐用年数があつて、どれだけのビジネスが成立つかというところがほとんどなんです。

ヨーロッパの人は環境をすぐ考えます。建築を二〇〇年や三〇〇年という長い歴史の中で考えてますから、建物と環境というのはいつも考えてますね。

ただ、このごろは、生活文化の中にアメリカ型が浸透してくるでしょう。これがすごく問題になってます。

河合 あれはものすごい問題だと思えますね。アメリカ文化というのは、食べ物を見たらわかる。

安藤 日本は戦後になってから、急に衣食住全部変わったわけですね。日本の遺伝子として残さなければならぬ文化の基礎を築いている衣食住が崩壊し、全部アメリカ型の投資効率だけを考えた安易な物質主義がはびこると、例えば日本、韓国、タイ、それぞれの国の歴史や文化や伝統がすっかり残っているところが、崩壊していつて、世界が全部同じようになってしまふと問題ですね。

河合 これはどう考えたらいいのか。この間もそういう話をしたんですけど、襖を開けるとときに座って開けるか、自動で戸が開くか

ということ、本当は人生観まで変わるのところがうのかと。日本の場合は、人生観でも、宗教観でも、倫理観でも、全部立ち居振る舞いから入ってるんですね。

立ち居振る舞いを大事にするから、あんまり「これせい。あれせい」と言われなかったわけです。言われなくても、生活に全部入っていたわけですから、それが完全に今潰れていくでしょう。

安藤 それと、親が中産階級で子どもには過保護でしょう。子どもは好きなようにやりま。我々の事務所に一流大学の子がアルバイトにくる。ハツと目を見張る。半パンツできたりする。「設計事務所に半パンツでくるな」と。河合 僕がそれこそ京大におつたときにも、ノックなしで入ってきて、「判こ」と、判を押してもらいにくる学生がいました（笑）。

安藤 家庭教育、人間教育をする時間がないからだと思うんですよ。いっぱい勉強しないとイケないから。

河合 そういうことの価値が低くなり過ぎていく。価値観が全然変わってしまったて、大人が悪いんです。大人がそれに抵抗していかないから。

安藤 もう一つ、人間が生きていくには、三五歳ぐらいまでに下地をしっかりとつくらないといけない。この間がフリーターでは困ります。

大学を卒業してから、就職を考えない人が意外といます。みんな下積みが嫌い。下積みは一〇年や一五年しないとイケないという話を学生を集めてしますと、みな横向いてる（笑）。へ変わったこと言うな、この人。自分が下積みしとつたから、下積みせい言うところの「か」みたいな感じですね。日本の国を希望のある国にするためには、何より重要なのはやはり子どもの教育でしょうね。

河合 それは本当にそう思います。子どもに会ってたら、それでもなかなかよい感じなんです。僕は小学生に教えに行っているから。子どもに接してたら希望が出てくるんだけど、全体を考えると……。

おもしろい人を探して

河合 さっき言われたように、設計の依頼があると考えなければならぬ条件はものすごく多いですよ。

自分の家だけつくる人は別だけど、安藤さんみたいに環境を考える、歴史を考えると、うことをしていたら、すごいでしょう。その場合に、ひらめきのほうが先行するんですか、それともいろいろですか。

安藤 いろいろな人たちから話を聞く機会も多いです。すごくおもしろい意見も聞けますから、結局は社会へ出たら耳学問しかできない

がおもしろいと思うことには、観光客も喜ぶんです。島全体を文化島にしてるんです。国際的に評価された芸術家が、ここで表現したいというんです。普通の五分の一ぐらいの値段でつくってくれるんです。アメリカとか、フランスの文化大臣もくるんです。「おもしろい」と言つて。年間四万人の人が訪れるんです。多くの子どもたちがきて、美術を見て、民家を見て、民家の中にある芸術を見て、一泊二日なんです。

もう一つ、神戸ロッケやサラダの会社が、十数年前静岡に工場をつくったんですが、周りに全部小さい柿の木を植えたんです。今一

〇年経つて、おいしい柿、本当の柿を贈つてくる。

彼が三年ぐらい前に、クリーンなエネルギーをつかうシンボルだと言つて、高さ三〇メートルぐらいの風車を三本つくりました。工場の敷地内につくったビオトープと柿の木、そして風車とその人の人生哲学を表しています。

こういう人たちが結構いるんですよ。そういう生き方もあるなというのが、今、あんまり世の中に知れ渡ってないです。

河合 日本にはすごくおもしろい人がいるから、そういう人ばかりを訪ねて歩く旅をいつかやるかもしれない。ほんとに。

(了)

文化人の本音 河合隼雄文化庁長官対談

です。そういう中で、興味のあるものをずうつとやっていくと、自分自身の問題点が出てきます。

岡山県の宇野の向こうに直島という島があるのですが、そこである会社が子どものキャンプ場をつくっているんです。

昔、たぶん豊かであった島なんですね。おもしろいのは、町の中に民家があちこちにいっぱい放置されているんです。それを安く借りまして、補強して元へ戻すんです。中を現代美術の展示場にしていくんです。村のおじいさんやおばあさんなど、現代美術を見たことない人が、ものすごく感激すると言います。村の人が

美術品をもつと世の人に

日展に行った。作品からの強いインパクトを受けて、身がひきしまるような思いがする。

院展のときにも思ったことだが、これだけの素晴らしい傑作が、展覧会が終わると、人目に触れる機会がほとんどなくなるのは、まことに残念である。これに対する何かよい方策はないものだろうか。

例えば、公共の施設でこれらの美術品を飾りたい希望をもつところを探す。そして一方、自作を二年間とか一定期間貸与してもいいと

文化庁の抜穴 河合隼雄

いう作者には登録をしていた。それらをよくマッチングして、これらの傑作を公共施設に展示すると、一般の人々は大いに喜ぶことだろう。

と言っても、破損の場合のための保険料が必要だろう。運搬費用はどうするのか。これらをどうするかを考えたつ、実現に向けて努力するボランティア活動、あるいはNPOを立ちあげてできないだろうか。何とか是非実現して欲しいと願っている。

◆長官対談◆

〔文化人の本音〕 河合隼雄文化庁長官対談
横尾忠則 画家
〔長官コラム文化庁の抜穴〕

◆特集◆

文化芸術の振興に関する基本方針

〔文化庁提言〕

独立行政法人の評価について

..... 河合隼雄 文化庁長官

〔基本方針〕

文化芸術の振興に関する基本的な方針

〔施策紹介〕

文化庁の予算、税制措置等

〔事例紹介〕

芸術団体重点支援事業

芸術拠点形成事業

文化体験プログラム事業

ふるさと文化振興事業

◆連載◆

〔ことばの探検〕

..... 山口仲美 埼玉大学教授

〔インタビュー 未来の扉〕

市川龜治郎 (歌舞伎役者)

〔いきいきミュージアム〕美術館・博物館事業レポート

神戸市立小磯記念美術館

〔舞台の現場から〕舞台を支える人々

歌舞伎と音響効果 国立劇場

〔子どもたちから見た伝統的建造物群保存地区〕

寺内町今井

〔美術館と著作権契約〕

美術品の展示

〔日本の伝統美と技を守る人々〕

表具用手漉和紙・備前紙製作・井上稔夫

〔在外研修だより〕

在外研修員 森永明日夏

〔文化ボランティア通信〕

◆文化庁ニュース◆

文化財防火デー

編集後記

色鮮やかに紅葉していた木々が、木枯らしに吹かれ、寒々とした幹をあらわにしています。

独立行政法人化という風は、国立美術館・国立博物館に何をもたらしたか？

国立美術館・国立博物館に足を踏み入れれば、職員

の対応や展示などから、それらが入館者に向きはじめたことを、きつと感じることがでしょう。その風は、法人に新たな息吹を吹き込んだのではないだろうか。

ちょっと、国立美術館・国立博物館をのぞいてみませんか。(お)

文化庁月報 12月号 (通巻411)

平成14年12月25日印刷・発行

編集—文化庁

〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2

発行—株式会社 ぎょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12

本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16

電話 編集 03 (3571) 2126

販売 03 (5349) 6666

URL : http://www.gyosei.co.jp

印刷所—ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円 〔本体514円〕 送料76円

年間購読料6,480円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先

(株) ぎょうせい営業部広告課

電話03 (5349) 6657 (ダイヤルイン)

©2002 Printed in Japan ISSN 0916-9849

本誌は本文用紙再生紙を使用しております。

文化庁では、ホームページで、文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見、文化庁月報の感想などを、ホームページのご意見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●

http://www.bunka.go.jp